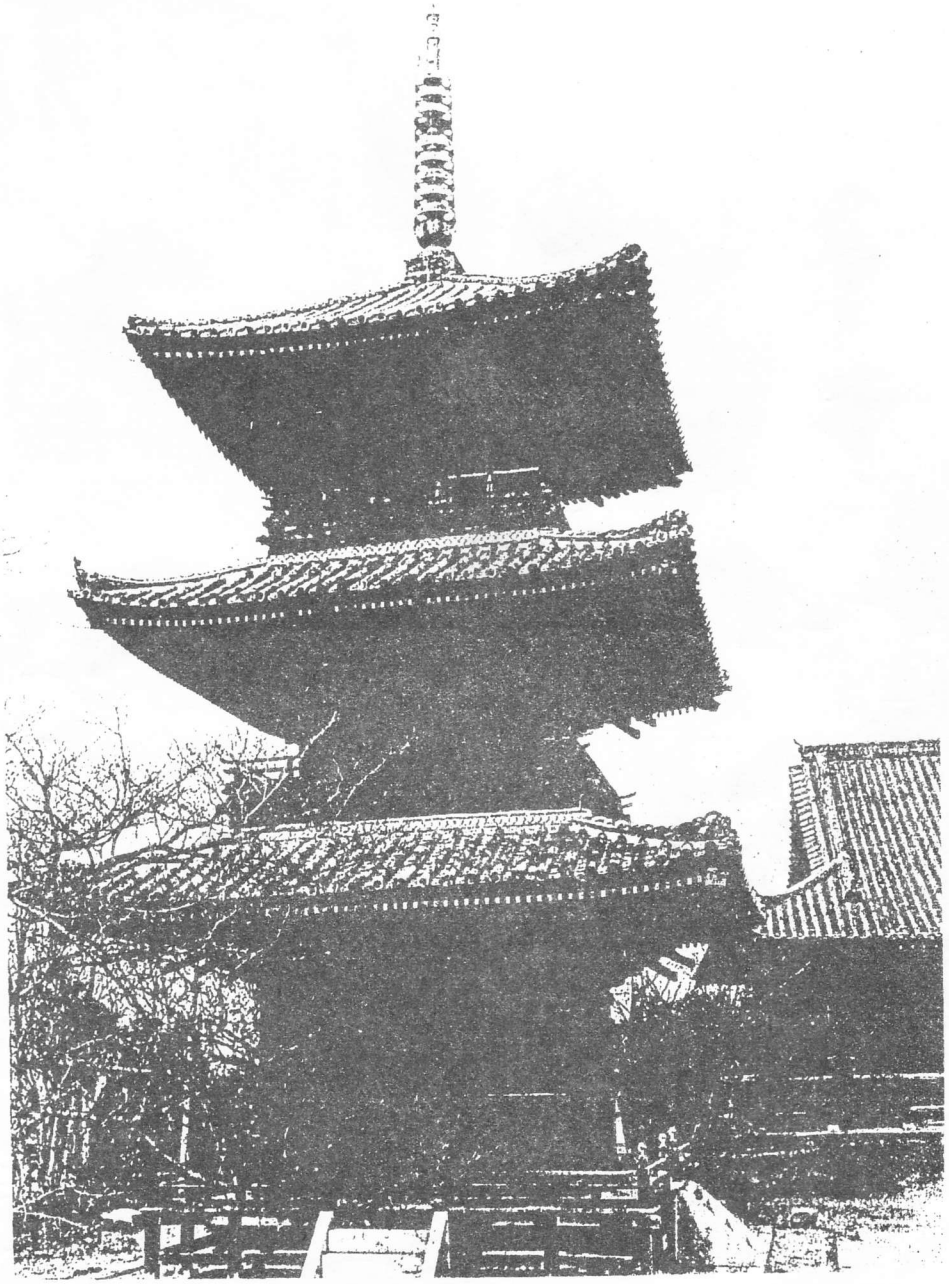
# 西大寺・昌久・牛窓の寺院と古城を訪ねて



餘慶寺三重塔

備陽史探訪の会 歴史民俗研究部会　平成10年4月19日(日)

# 西大寺・邑久・牛窓の寺院と古城を訪ねて

## 《見学スケジュール》

７：３０　福山駅北口発
７：４５　福山東ＩＣ
８：３５　山陽ＩＣ
８：５５　西大寺観音院着（トイレ、隣接の西大寺公園で朝市を開催）
９：３５　西大寺観音院発
９：４５　乙子城下着
９：５５　乙子城本丸着（登山時間は１０分弱）
１０：１５　乙子城本丸発
１０：２５　乙子城下発
１０：４０　砥石城下着（登山時間は２０分弱、登山口に簡易トイレ）
１１：０５　砥石城本丸着
１１：３５　砥石城本丸発
１１：４５　砥石城下発
１２：００　余慶寺着（昼食・トイレ）
１３：００　余慶寺発
１３：２０　夢二郷土美術館着（トイレ）
１４：００　夢二郷土美術館発
１４：１５　静円寺着
１４：４５　静円寺発
１５：０５　朝鮮通信使資料館着（トイレ）
１５：２５　朝鮮通信使資料館発
１５：３０　本蓮寺着（トイレ）
１６：００　本蓮寺発
♣この時点で時間に余裕があれば、式内名神大社安仁神社に寄ります。
１６：４５　山陽ＩＣ
１６：５５　吉備ＳＡ着（トイレ）
１７：０５　吉備ＳＡ発
１７：４５　福山東ＩＣ
１８：００　福山駅北口着

## 《注意》

①見学コースはあくまで予定です。進行状況により変更する場合があります。
②寺社に朱印をお願いする方は到着後すぐに寺（社）務所に提出し、集合時間に遅れないようにしてください。
③西大寺公園では当日大規模な朝市を開催しています。買い物はかまいませんが、くれぐれも集合時間を守ってください。
④山城に２ヶ所登ります。それほど険しい山城ではありませんが、足腰に自信のない方はバスでの休息をお願いします。
⑤寺院等の木造建築物には絶対に土足で上がらないでください。
**⑥本蓮寺境内は禁煙になっています。厳守してください。**
⑦野草（とくに民家では）を採ることのないようにお願いします。

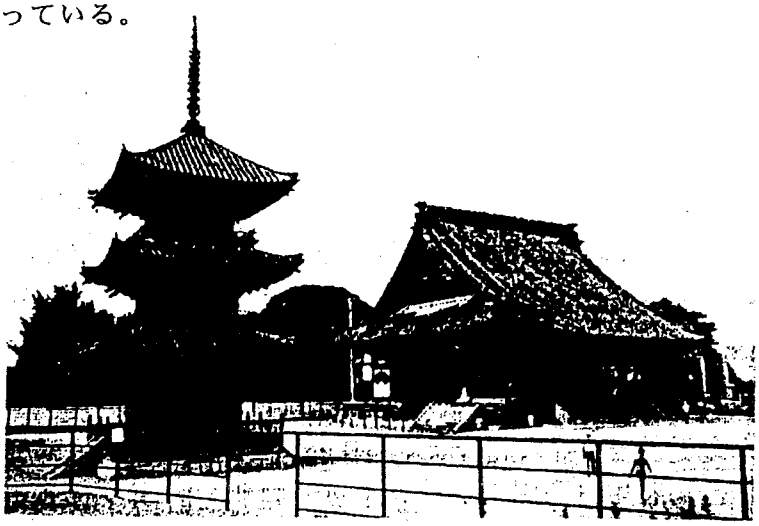
# 西大寺観音院

吉井川の河口に近い岡山市西大寺中３丁目にある高野山系真言宗別格本山。

山号は金陵山(きんりょうざん)，創建は『金陵山古本縁起』（県指定重要文化財）によると、７５１年（天平勝宝３）藤原皆足が千手観音の本尊を安置したことにはじまり、７７８年（宝亀９）安隆上人が伽藍を建立した際に竜神から授った犀(さい)の角を堂の下に納め、寺名を犀戴(さいだい)寺としたとあるが、南北朝時代にはすでに西大寺と称しており、あるいは当初からであったかも知れない。

また『備陽国誌』は、報恩大師開基の備前四十八カ寺の一つとしている。寺運盛時には塔頭も多かったが、次第に減少し、現在は観音院だけとなっている。諸伽藍は１６７８年（延宝６）竣工の三重塔以外は江戸時代末期の建物で、本堂は前面吹き放しの大床になっており、会陽（１９５９年県指定重要無形民俗文化財）に際し、裸群の宝木(しんぎ)争奪戦にふさわしい広さを持ち、境内南に下部を石造りにした竜宮門があって、その前が会陽の裸群の垢離(こり)取場となっている。

寺宝では鐘楼にある朝鮮式梵鐘（国指定重要文化財）や、大床にかかげられた狩野永朝の会陽絵馬、さらに『西大寺文書』が有名。なかでも室町期に作成されたと推定される『西大寺境内古図』には、その境内とともに門前に市座の成立していたことが記されている。なお、市街地の「西大寺」は、中世から門前町として栄え現在に至っている。



西大寺観音院

# 《参考》会陽（裸まつり）

古来寺院では、旧正月元日から１～２週間にわたり修正会（年始の法会）が厳修される。その修正会の結願（満願）の行事が会陽である。岡山県内では岡山市西大寺観音院、真庭郡落合町木山寺、英田郡英田町林野安養寺、岡山市金山寺などの会陽が有名である。

土地の古老は「エヨウ」といわないで「エエヨウ」と呼ぶ。古くは「エエヨウ、エエヨウ」と掛け声をかけながら裸群がもみあったと思われ、この掛け声がこの行事の名称になったと推測される（民俗行事にはこのような事例が少なくない）。

会陽の折、牛玉窓から投下されるシンギ（第２次世界大戦後は宝木の文字があてられる）は雄シンギ、雌シンギの一対をなす。シンギの材は、寺により異なる

が、カシ、クスノキ、サカキなどから作る。作り方は秘伝とされ、長さも、寺により１０cm～２０cm前後とさまざまである。シンギは牛玉紙に包まれ、香を薫じ込めたのち投下される。シンギは極めて霊妙な力を持つものとされる。このシンギは全国各地に見られる粥掻棒に通じるものと考えられる。

旧暦１２月２４日は事始めとしてシンギ製作の道具類を研ぐ。２６日が御供餅つきで、２８日午前零時、シンギの原木を取りに行く。この道中はいっさい無言と決まっている。この日のうちに原木からシンギを規定の形、大きさに作る。

会陽は、旧暦１月１４日の深夜から１５日未明にかけて行われるが、１１日から１３日は「本押し」のリハーサルともいうべき「地押し」が行なわれる。そしていよいよ１４日の夜がふけると、大床や牛玉窓の下には、シンギを獲得しようと、裸群があふれる。

深夜、すべての灯火を消してシンギが投下される。シンギを手に入れようとする裸群の渦が出来る。シンギはその年のアキ方に抜けるといい伝えている。シンギを獲得した福男が祝い主の家にかけ込み、一升桝の米の上にシンギを立てると、シンギ取りの白熱戦は終了する。西大寺の会陽は、裸群が大床を踏む音は遠く対岸の讃岐まで響いたと江戸期の書物に記されている。

シンギ取りの翌々日にはシンギ納めの「祝い祭」や飾り付け、数日後には「後祭」が行なわれて会陽の関連行事はすべて終了する。

## 《参考》修正会

修正月会の略称で、単に修正ともいい、異名俗称も多い。寺院で正月元日から三日間あるいは七日間修される法会のこと。または民間で正月の一定日に行われる年中行事。

国家泰平を祈願する法会であるとともに、先祖祭・農耕感謝および農耕予祝の行事であったとされる。インドや中国で行われていた法会であったか否かは不詳。わが国では奈良時代の初めから各寺院ごとに修されていたと推定されているが、記録では神護景雲元年（７６７）正月八日、畿内七道諸国の国分寺に七日間の吉祥天悔過法会を命じたこと（『続日本紀』）に始まるという。この史料は、このとき国家的規模の行事となったことを意味するといわれる。

行事内容は宗派などによって異なるが、特色として悔過行があり、仏前の荘厳に餅・造花・灯明があることなどで、そのほか裸押しや田楽・鬼踊なども伴う。

現在、修正会としては岡山県西大寺の会陽、大阪四天王寺のどやどや、奈良県長谷寺の唯押、東京浅草寺の富突などが著名。また民間では「おこない」と称される修正会が各地にみられる。

## 《参考》西大寺文書

岡山市西大寺の金綾山西大寺が所蔵する主として中世の古文書・旧記８３点をいう。この地は鎌倉時代には金岡東庄といい、大和の西大寺の末寺である額安寺を領家と仰いだので寺名を西大寺といい、門前町も西大寺と称するようになった。古文書の大部分は備前西大寺の寺領に関するもので、赤松・浦上・宇喜多ら室町・戦国時代の守護や武士の寺領に関する安堵状や寄進状が多い。記録の中では、中世に書かれた『西大寺境内古図』がこの時代の地方の門前町や座の資料としては珍しく、１５０７年（永正４）の縁起絵巻物は絵画としても出色のものである。

# 西大寺観音院銅鐘

１９０１年（明治３４）国指定重要文化財。

岡山市西大寺にあり、「朝鮮鐘」といわれる梵(ぼん)鐘。全高103cm、口径65.2cm、375kg鋳銅製である。朝鮮鐘は新羅・高麗時代に朝鮮半島で造られた鐘である。この鐘は海から揚がったと伝えられるが、渡来の由来は不明。

鐘身を吊す竜頭に接して円筒形の旗挿(はたさし)があり、鐘身は紐によって作られている。縦横の区画を示す袈裟襷はない。上帯と下帯および乳郭の縁帯には細密な文様があり、胴部には飛天と蓮華文の撞座(つきざ)が各２カ所設けてある。また、鐘身上部の乳郭内に３段３列の乳状突起を置いてある。

一般的に和鐘と違って朝鮮鐘は装飾文様が多く、和鐘の単純簡素な形体と異なっている。

# 《参考》西大寺金陵山古本縁起

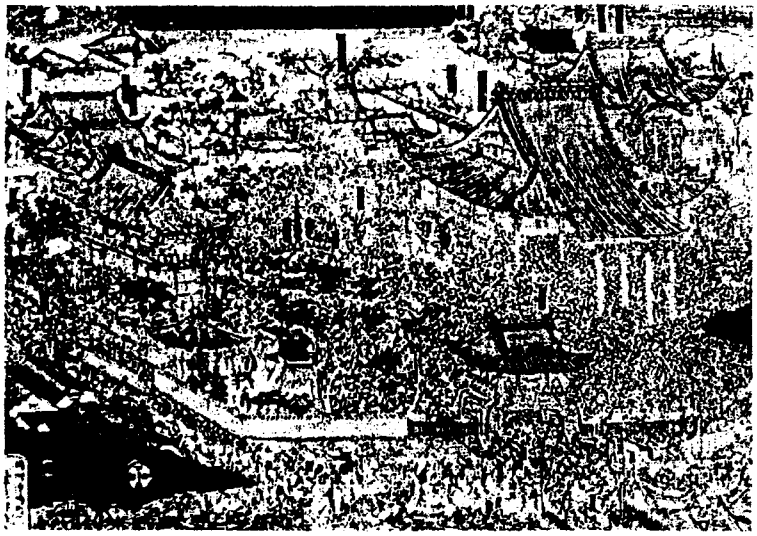
１９７１年（昭和４６）岡山県指定重要文化財。岡山市西大寺の西大寺蔵。

紙本著色２帖。縦34.2cm、長さはそれぞれ12.53m、13.52m。

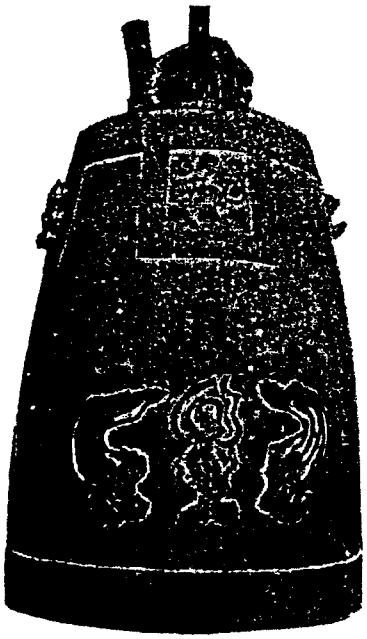
周防国玖珂の庄司の妻、藤原皆足が仏師（実は長谷観音の化身）に千手観音像を彫らせ、彩色のため都へ運ぶ途中、金岡の浦に停泊したところ、船が動かなくなったのでこの地に小堂を建て、観音を安置したという西大寺の縁起を描いた絵巻。もとは巻子(かんす)本であったが、現在は冊子に仕立て直されている。

第二之巻の終わりに「于時永正四年丁卯雪月鬼宿に記し終り侍る事然なり」とあって、１５０７年（永正４）１１月１５日に完成したことがわかる。室町中期の特色をよく示すもので、絵巻は当時民衆に対する布教の効果的な手段であった。

なお、「古本」というのは１６６１年（寛文元）にその後の霊験を書きたして第三巻としたからで、以後延宝、享保の書き継ぎもある。



「西大寺会陽図」（1883年ごろ）



西大寺観音院銅鐘

# 乙子城（おとごじょう）

乙子城は、岡山市乙子の吉井川河口に突出した丘陵先端の小山山頂に所在する梯郭式の小型山城で、城郭の段が比較的よく遺存している（比高４７．８ｍ）。

城の立地は、邑久郡の千町平野南部に横たわる山塊の吉井川に突出した西端にあり、南から西に広がる児島湾を望み、また、北西には吉井川を隔てて吉井川右岸の上道郡南東部の平野を望む。この位置は、戦国後期に備前国東半を支配した戦国大名の浦上宗景の領地の南西端にあたり、児島湾と上道郡南東部をにらむ臨海性の戦略拠点であった。

当時、浦上宗景に仕えていた宇喜多直家が、天文１３年(1544)に宗景の命によってこの地に城砦を構え、足軽３０人と３００貫の領地を与えられて弱冠１６歳で城主となった。のちに備前国を平定し、戦国大名に成長した直家の城主としての第一歩を示す記念すべき城となった。

直家は、この城に５年在城して、この地の治安維持と戦功をあげ、その恩賞に上道郡竹原（当時奈良部）の新庄山城を与えられ、天文１８年(1549)に新庄山城に移転するが、乙子城を持城にし、舎弟の浮田忠家を城主に置いた。永禄２年(1559)に直家が亀山城主になり、忠家も亀山城に移ると、当城には城番がおかれ、直家の備前平定が進むにつれて存在価値が薄らぎ、廃城にされたものであろう。

城郭の縄張りは、小丘陵頂部に本丸を構え、前方後円墳形状に南東に延びる稜線側に４段の腰郭を設け、その先にやや広い出郭を配置している。そしてその下に現在乙子大明神境内となっている二の丸と判断される郭を設け、二の丸には尾根先側と南側面に１段ずつの腰郭とを備えている。

大手筋は、二の丸南側の現在の参道筋と判断される。城郭造成は、各郭とも二段築成である。城跡は、本丸跡の背後に土塁の一部が遺存しているが、境内地以外がほとんど畑地となっていたため、郭自体の変形もなされている。水の手は井戸が未確認であるが、城内か城外至近距離に水利施設を設けていたであろう。

城郭構造物は、土壇築成・土塁などからみて、掘っ立て柱建築物と櫓・柵などが主体をなしていたと判断され、中世的臨戦用城砦の様相と内容を持ったものであろう。また、城郭構造が有事籠城型であり、日常生活の場は、南東山麓に根小屋が形成されていたものと判断されるが、遺構の確認には至っていない。

# 《参考》沼城（亀山城）

沼城は、吉井川と旭川の中間の小河川である砂川流域西辺の岡山市沼の小丘陵に所在する連郭・輪郭折衷式の山城で、総延長４５０ｍにわたり城郭施設が構築されている（比高３５ｍ）。城の築かれた山の形が亀に似ているので亀山城とも呼ばれた。周辺は砂川下流の湿地帯で、自然の堀を形成していた。城郭の規模は備前国屈指のものだが、畑地や校地に利用され、遺構の一部は破損している。

天文年中（１５３２～１５５５）は浦上宗景の家臣、中山備中守信正の居城であったが、新庄山城主の宇喜多直家が１５４９年（天文１８）信正の娘を妻に迎え、１５０９年（永禄２）信正を謀殺してこの城を手に入れた。

その後直家は、１５７３年（天文元）に岡山城に移るまで１４年間在城し、この城を拠点に竜の口城（岡山市湯迫）、三星城（英田郡美作町）、金川城（御津郡御津町金川）、高田城（真庭郡勝山町）などを次々に攻め落とし戦国大名にのし上がった。

(S＝1/2,500)

登り口

47.82

乙子城跡

23.6

36.7

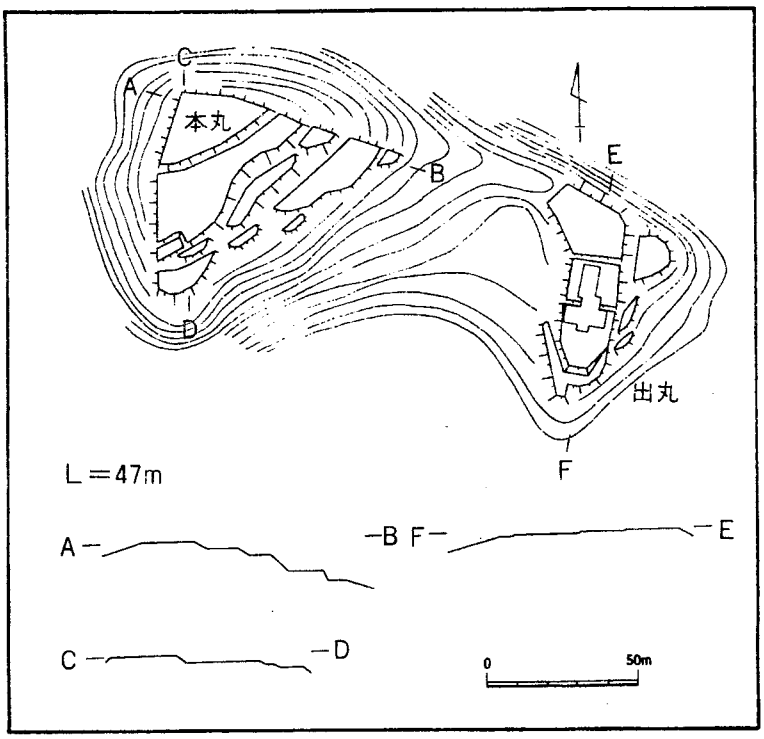
乙子大明神

善兵衛樋門

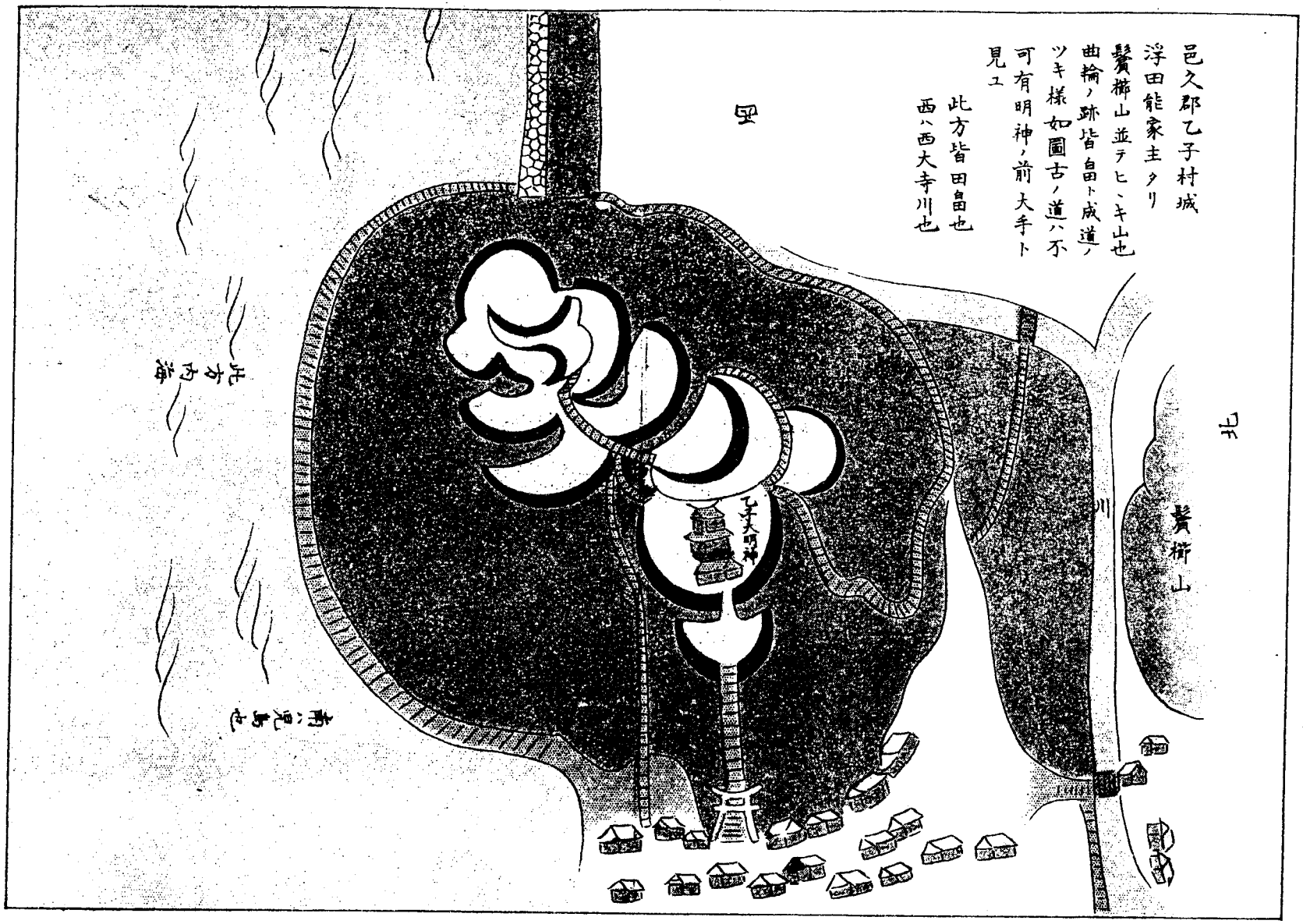
登り口

乙子橋

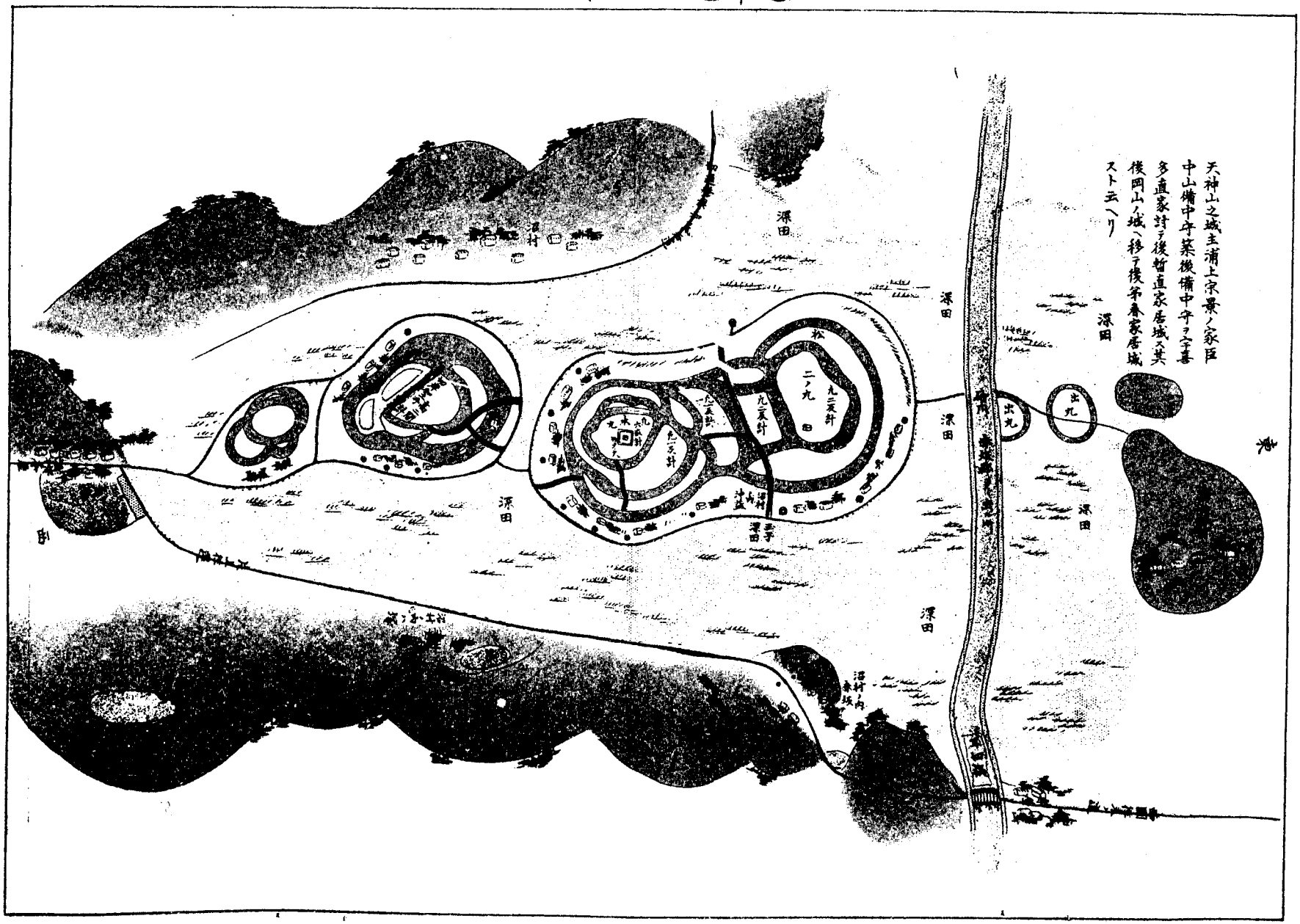
永



# 邑久郡乙子城古圖


邑久郡乙子村城
浮田能家主タリ
鬢櫛山並テヒヽキ山也
曲輪ノ跡皆畠ト成道ノ
ツキ様如圖古ノ道ハ不
可有明神ノ前大手ト
見ユ
此方皆田畠也
西ハ西大寺川也
乙子大明神
鬢櫛山
川
北
西

# 上道郡亀山(沼ノ)城古圖


天神山之城主浦上宗景ノ家臣
中山備中守築後備中守ヲ之喜
多直家討テ後暫直家居城ス其
後岡山ノ城ヘ移テ後弟春家居城
スト云ヘリ
深田
深田
深田
深田
深田
深田
出丸
出丸
二ノ丸
丸三反計
丸三反計
丸三反計

# 砥石城（といし）

邑久郡邑久町豊原にあった戦国時代の宇喜多氏ゆかりの山城（比高９５ｍ）。砥石城は、吉井川下流左岸の大穀倉地帯である、千町平野の南に横たわる山塊の支尾根の砥石山の山頂部に所在する連郭式山城で、総延長２５０ｍにわたって城郭施設が構築されている。

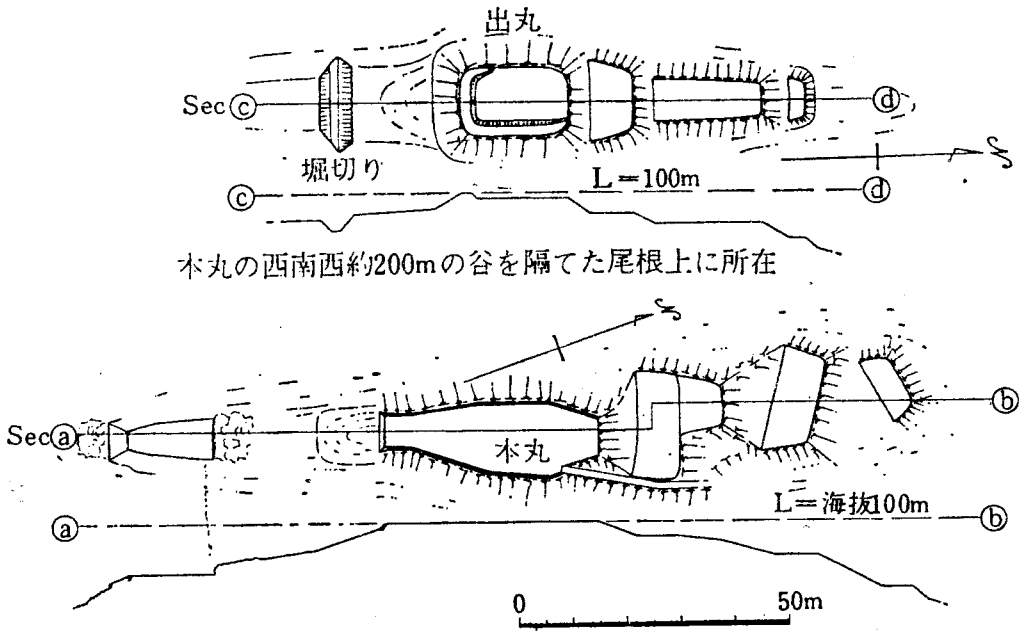
砥石山は、千町平野背後に横たわった山塊の中ほどで平野に向けて延びた半島状の山で、眼下に吉井川左岸の平野が開け、中世社会の拠点となった福岡荘や熊山、さらには吉井川右岸の西大寺をも望み、戦術的要衝をしめる。

千町平野は備前国でも屈指の沃野であり、南西半は古代末以来の豊原荘である。また、南北朝の争乱期から戦国期にかけて備前国東部で活躍した多くの名主層を生んだ土地柄であり、後に備前国を平定した宇喜多直家もこの地に出生した。

築城の経緯は定かではないが、『備前軍記』等の江戸時代の記録によれば、大永年間（１５２１～１５２８）浦上村宗の家臣、宇喜多和泉守能家が築城したものと伝えられる。

能家は久家の子として邑久郡に住み、備前守護代浦上村宗につかえた。村宗の討ち死に後、村宗の二男宗景へつかえた。１５３４年（天文３）６月、高取城主島村豊後守の夜討ちによって城主能家は自害し落城した。しかし、主君浦上宗景はこの城を島村氏に与えず、浮田国定（能家の庶腹の弟）に与えた。１５４９年（天文１８）宇喜多直家は、主君宗景の軍勢と合流して、備中三村氏と内通した砥石城主浮田国定を攻め落とし、城主に弟春家を任じた。のち直家が沼城（亀山城）から岡山城に入るとき、春家を沼城に移して部将にこの城を守らせた。

この城跡は砥石山（標高１００ｍ）の頂上に３段に区切られ、最上段（本丸）は東西に長く、周囲は約３００ｍにもおよび、平坦地となっている。それについで東方に二の丸がある。本丸の西の三の丸は細長く、堀切（空城）の向こうは高取山に続いている。




砥石城略測図

## 《参考》宇喜多氏

室町戦岡期の備前の土豪武士。戦国大名。先祖は児島高徳の子長秀というが、確証がない。長秀の子宗家（文明年間）、孫久家（延徳年間）の事跡は不明だが、実在したことは『西大寺文書』」確認できる。久家の子という能家は備前守護代浦上家の殊勲の宿老で、浦上則宗、村宗を補佐。後に邑久郡砥石城に引退したが、１５３４年（天文３）島村豊後守の夜討ちにあって自害。宇喜多能家像は（岡山県指定文化財）は、もと菩提寺の紅岸寺にあった（現岡川県立博物館蔵）。

嫡子興家は備後鞆津に挑れたが、備前松岡の豪商阿部定善のもとに身を寄せ、その娘を妾とし春家、忠家をもうけ、１５３６年（天文５）没。

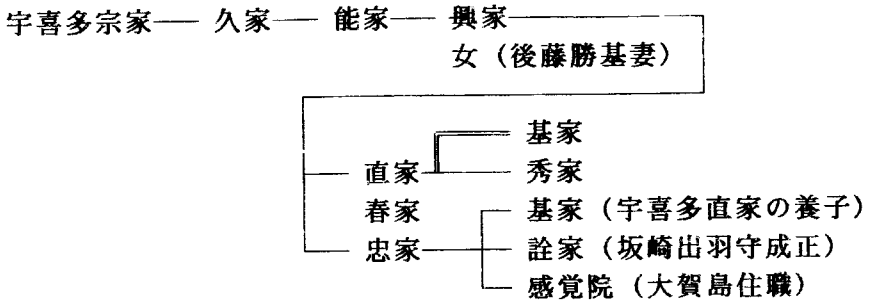
興家の嫡子直家は邑久郡笠加村の尼寺の伯母のもとで育ったが、後に浦上宗景に仕え、１５１４年（天文１３）自立、乙子城主となる。その後浦上家の宿老達を討って沼城主となり、権勢は主家を凌駕し、宗景と不和となる。

１５６６年（永禄９）三村家親を美作興禅寺で殺し、その子元親を翌年明禅寺合戦で破る。ついで１５６８年金川城主松田元成を滅ぼし、１５７０年（元亀元）金光宗高を自害させて岡山を奪い、１５７３年（天正元）から翌年にかけてこの地に岡山城を築き、本拠を移す。

１５７７（天正５）年直家は宗景を天神山城から追放して備前・美作を縦一したが、１５８１年（天正９）病没。同年直家の養子基家は毛利勢と戦い、児島八浜合戦で討ち死に。直家の嫡子秀家は母於福とともに秀吉に寵愛され、秀古の猶子となって権中納言、五大老の一人になったが、１６００年（慶長５）関ケ原合戦に敗れて八丈島へ配流、１６５５年（明暦元）困苦のうちに病死した。

直家の異母弟忠家は直家を援助したが、秀家と対立し、１５９９年（慶長３）家中騒動の後、徳川家康に預けられ、関ケ原合戦では徳川方に属した。その子詮家は津和野藩主となって出羽守に任ぜられ、坂崎出羽守成正と改名。１６１５年（元和元）千姫の大坂城脱出に尽力したが、家康の違約を恨み翌年自害。成正の弟感覚院は出家して大賀島寺住職になった。

### 《宇喜多氏系図》




## 《参考》宇喜多直家 1529~1581(享禄2~天正9)

備前の戦国大名。幼名八郎、元服して三郎左衛門、のち和泉守宇喜多興家の子。１５３４年（天文３）砥石城落城後、邑久郡笠加村（現邑久町）の尼寺の叔母に養われ、１５４３年（天文１２）浦上宗景に仕える。翌４元服、初陣の功により邑久郡乙子城、３００貫の所領、足軽３０人を預かる。

１５４９年（天文１８）宗景の命により砥石城主浮田大和を討ち、奈良部城を預けられる。１５５９年（永禄２）宗景の命で高取山城主島村貫阿弥、沼城主中

山信正を討つ。ついで金川城主松田氏麾下の竜の口城主、穐所元常を計略をもって滅ぼす。その後、美作の三星城主後藤勝基、金川城主松田元盛と結び、備中成羽城主三村家親に備える。

１５６５年（永禄８）美作に侵入した三村勢を撃退、翌年再度侵入した家親を美作の興禅寺で倒す。１５６６年（永禄９）直家の台頭を憎む宗景、親の復讐を誓う三村元親はともに毛利元就に同盟を求め、直家は危地に陥ったが、角南如慶の外交手腕で毛利と同盟して窮地を脱し、翌年備前に侵入した元親の大軍を上道郡沢田村の明禅寺合戦で破り、備中の諸城を落とす。

１５６８年（永禄１１）松田氏の内紛に乗じ、虎倉城主伊賀久隆と謀り、松田元輝を滅ぼす。同年、毛利氏を裏切り尼子氏と同盟、翌年毛利・三村勢と備中で戦って撃退。１５６９年（永禄１２）尼子勝久は美作に侵入して毛利勢と戦い、直家は尼子に加勢し諸城を奪う。

１５７０年（元亀元）かねて謀反の噂のあった岡山城主金光宗高を自害させ、１５７３年（天正元）岡山城を築き沼城から移る。翌年将軍義昭の依頼で毛利、宇喜多は再び和睦。１５７５年（天正３）毛利と離反した松山城主三村元親を挟撃して滅ぼし、同年毛利に加勢して児島常山城を落とす。ついで１５７７年（天正５）和気郡天神山城を落とし、浦上宗景を追放する。

こうして名実ともに備前・美作を統一した直家は１５７７年（天文５）播磨で羽柴秀吉と戦って敗れ、毛利・羽柴の間に立ち去就に迷ったが、１５７９年（天文７）戸川秀安の進言により、小西弥九郎（行長）を使者として織田・羽柴と和睦する。１５７８（天文６）年家臣の讒言を信じて虎倉城主伊賀久隆を毒殺。翌年三星城主後藤勝基を滅ぼし、美作で毛利勢と戦う。同年備中から備前に侵入した小早川隆景を辛川合戦で撃退、ついで１５８１年（天正９）児島に侵入した隆景の軍を撃退するが、対毛利戦の最中に病死した。

## 《参考》宇喜多能家　?~1534(?~天文3)

戦国時代の武将。宇喜多久家の子。浦上則宗、村宗に仕え、和泉守を称す。

１４９７年（明応６）則宗の嫡子宗助とともに三石城を預かった。同年、宗助は松田元勝と戦って御野郡富山城を攻めたが、逆に竜の口城の兵力に包囲される。能家は奇計をもって松田勢を破ってこれを救出。

１４９９年（明応８）則宗は同族の浦上村国と争い、敗れて白旗城に逃れたとき、親族・譜代の者まで浮き足立った。そのとき能家は義を説いて叱時激励、軍をまとめて則宗を救う。１５０２年（文亀２）則宗の没後、赤松政村と別宗の子村宗は不和となり、１５１８年（永正１５）村宗は居城三石城を政村に攻められ、主家赤松を敵として城兵は大いに動揺したが、能家はよく説得、よく防戦して撃退した。

１５２０年（永正１７）、政村は村宗の麾下中村五郎を討つため美作に出兵、能家も村宗とともに救援に向かったが，兵が離散して危地に陥る。能家は寡兵をもって大軍を破り勝利を収める。１５２３年（大永３）村宗は浦上村国と不和となり、三石城を発し、能家の二男宇喜多四郎を先陣に橘港に攻め入る。四郎は討ち死にし能家は悲憤に堪えて奮戦する。その勇名は大下にとどろき、管領細川高国は能家に名馬名釜を贈って武男をたたえた。愛児の討ち死にと老哀のため砥石城に隠退し、剃髪して常玖と号したが１５３４年（天文３）高取山城主で浦上家の老臣島村豊後守が、先君村宗の遺命と称して砥石城を襲う。能家は老病のため

歩行ともなわず自害。

絹本着色宇喜多能家像（岡山県指定重要文化財、岡山県立博物館蔵）は、能家が生前その肖像を描かせ、南禅寺の僧九峰宗成に頼んでその行状を記したもので、邑久郡紅岸寺に納めた。

## 《参考》島村豊後守 ?~1559(?~永禄2)

戦国末期の土豪武士。島村氏は邑久郡豊原庄の地頭級の土豪で、１４６９年（文明元）島村弾正左衛門、１４８２年（文明１４）嶋村宋証入道の名がある。豊後守は、邑久郡高取山城主で浦上村宗の重臣弾正左衛門貴則の子。

貴則が１５３１年（享禄４）摂津天王寺合戦で討ち死のあと家督を相続、浦上宗景の重臣となる。１５３４年（天文３）６月宗景の家臣宇喜多能家を砥石城に攻めて滅ぼしたが、１５５９年（永禄２）宗景に謀反の嫌疑をうけ、能家の孫宇喜多直家に攻められ滅亡した。

## 《参考》浦上氏

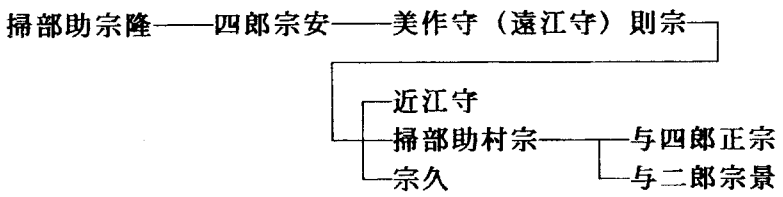
戦国時代の武将。先祖は赤松播磨守則景から分かれたといわれ、その７代の孫が浦上掃部助宗隆で赤松氏に仕え、その子四郎宗安は嘉吉の乱（１４４１年）の時、赤松満祐と共に討ち死に。その子則宗は、赤松政則を補佐して滅びた赤松家を再興し、美作守ついで遠江守に任ぜられた。応仁の乱が起こると、浦上則国、宇野入道らと協力して備前福岡で山名の部将小鴨大和守を討ち、和気郡三石城を預かり備前守護代となる。赤松政則が侍所の所司になると、別宗も所司代に任ぜられて在京したが、１５１２年（永正９）三石城で死去。その子村宗が後を継ぎ三石城を預かり、赤松家の仕置を務め政村に仕えた。政村の寵臣の謀略で政村と不和となり「三石合戦」が起こったが、政村が剃髪し一時和睦して村宗が実権を握る。

１５２１年（大永元）村宗は足利義晴を奉じて入京し、これを将軍職につけ、翌年帰国したが、権勢著しく、赤松政村、譜代老臣と対立。村宗は政村（常印）を殺し、播磨西部・備前東部を領有する戦国大名となる。

その後１５３０年（享禄３）細川家の内紛に関係し、摂津天王寺において細川晴元と戦って討ち死にした。その子政宗・宗景が播磨室津城を守ったが、兄弟不和を生じ、宗景は備前天神山城に移った。宗景は備前東部および美作の一部を領有したが、その部将宇喜多直家が１５５８年（永禄元）島村貫阿弥・中山備中を討って以後台頭し、浦上家の実権を握るに至って不和になり、１５６７年（永禄１０年明禅寺合戦以後は仇敵の間柄となる。

１５８２年（天正１０）宗景は直家の軍勢に天神山城を落とされ播磨に逃れ８０余歳で死去したといわれる。

### 《浦上氏系図》



## 《参考》浦上宗景

生没年不祥。備作地方の戦国大名。浦上村宗の次男。

１５３１年（享禄４）村宗が摂津天王寺で討ち死の後、播磨室津城に拠ったが、兄政宗と不和となり、和気郡の天神山城に拠り、備前東部および作州２郡を支配下におく。

１５４４年（天文１３）尼子勢の美作侵入でで美作の諸城を奪われる。さらに１５５３年（天文２２）再度の尼子勢の侵入で敗れたが、播磨の浦上政宗、備前西部の松田氏の勢力が衰え、備前一円を支配下におき、漸次美作の旧領を奪回していった。

１５５９年（永禄２）老臣中山備中守信正（沼城主）、島村貫阿弥（高取城主）の謀反の噂を信じ、家来の宇喜多直家に謀殺させる。以後直家が台頭し、家中の実権を握るに至って不和となり、１５６７年（永禄１０）の明禅寺合戦の後、三村・毛利と結んで挟撃しようと謀ったが果たさせなかった。ついには１５７７年（天正５）宇喜多勢に攻められ、天神山城が落城。播磨へ落ちのび、８０余歳で病死したという。

## 《参考》三村家親 ?~1566・2・5(?~永禄9)

戦国時代の備中松山城主。三村宗親の嫡子として生まれる。父の遺領をつぎ、毛利氏の支援をうけ勢力をしだいにひろげ、１５３３年（天文２）成羽に侵入。１５５３年（天文２２）猿掛城主荘為資、１５６１年（永禄４）には、備中国の中心地松山城主荘高資を破り、本拠を成羽から松山城に移した。家親は、当時尼子氏の勢力下にあった備中全土を攻略し、美作・備前へも進山しようとし、備前の宇喜多直家と争うことになった。

１５６３年（永禄６）家親は兵を備前に進め、一挙に船山城（岡山市牧右）を攻略し、宇喜多勢の西進をはばんだ。さらに１５６５年（永禄８）５月、北に転じて兵を美作路に派遣し、作東地方の三星城（現英田郡美作町）を攻めたが、攻略することができず、翌年の春、再び作州に攻めこんでいった。宇書多氏の諸城を攻め落としていったが、直家により美作の興禅寺（久米郡久米南町下籾）で暗殺された。現在、家親の墓は頼久寺（高梁市頼久寺町）にある。

## 《参考》竜の口合戦

岡山市祇園にあった竜の口城を宇喜多直家が１５６０年（永禄３）から翌年６月にかけて竜の口城を攻撃した戦い。この城は金川城（御津郡御津町）の南の出城で、弘治～永禄のころ穭所元常が守り、松田氏を支えていた。直家は弟忠家を将とし、長船又三郎（のち紀伊守）、延原土佐の兵を加え「大挙して竜の口城を攻撃した。元常は城を出て竹田河原に敵を破ったが、再度の攻防で破れて段の原（中原橋北東）に退いた。

直家はこの攻防で力攻めの不可能を知り、家臣の岡清三郎（一説に岡剛介ともいう）に命じて計略をもって元常に近侍させた。元常の信頼を得た清三郎は、１５６１年（永禄４）６月、元常が酒に酔い、尺八の音に聴き入っているところを殺した。直家は直ちに兵を出して竜の口城を攻めると、元常を失った城兵は戦意を喪失、竜の口城は直家の子に落ちた。直家はこの城主に岡清三郎をあてた。

# 《参考》大賀島寺

大雄山山上の大ヶ島にある天台宗の古刹。
山号は大雄山。本尊は行基作と伝える千手観音立像。もと金山寺（現岡山）末。１７１２年（正徳２）の当寺由緒書上によると、孝謙天皇の時代、報恩大師によって創建されたと伝える備前四八ヵ寺の一つ。開創以後の寺史はいま一つ詳らかでないが、１３００年（正安２）弘法寺（現牛窓町）の本堂供養にあたり、当寺の僧四名が散華と梵音を奉仕している（「本堂供養請定」『弘法寺文書』）。

当寺一帯は中世の豊原荘のうちで、備前の戦国大名に成長した宇喜多氏は同荘内を本貫地としたと思われるので、戦国期の頃当寺は宇喜多氏と関係が深かったのは確かである。たとえば、１６世紀初頭に活躍した宇喜多能家が居城にした砥石城は、大雄山の峰続きにあり、１５３４年（天文三）能家が同城で討死したあと、当寺に葬られたという所伝は、ます信じてよいと思われる。

能家の孫直家は、当寺本坊東覚院に大破した石津宮（現岡山市の石津神社）の再興勧進を命じている（年未詳４月１７日「宇喜多直家書状」『黄薇古簡集』）。

１５７０年（元亀元）本堂・鎮守堂・仁王門等が炎上、慶長年間（１５９６～１６１５）に至って、その頃当寺の末寺であった金山観音寺住持の円智（豪円）が、その復興にあたった。

前掲由緒書上は「住僧円蔵坊亮諦と申老僧一人、本尊の供養怠らず相勤居申候、此円蔵坊亮諦は宇喜多の子孫にて、一族悉く死亡の後、菩提のため発心出家して此地に任す、此地は元来宇喜多和泉守能家、砥石城に居住の砌、砥石城と大賀島守とは相隣るが故に、宇喜多氏代々当寺を尊崇して菩提寺とせり、宇喜多与太郎の甲冑は此人の持ち来れる也」と記す。

当寺が関ヶ原合戦による宇喜多氏滅亡後もその一族と関係をもち、その菩提の寺としての役割を保ち続けていたことを示している。

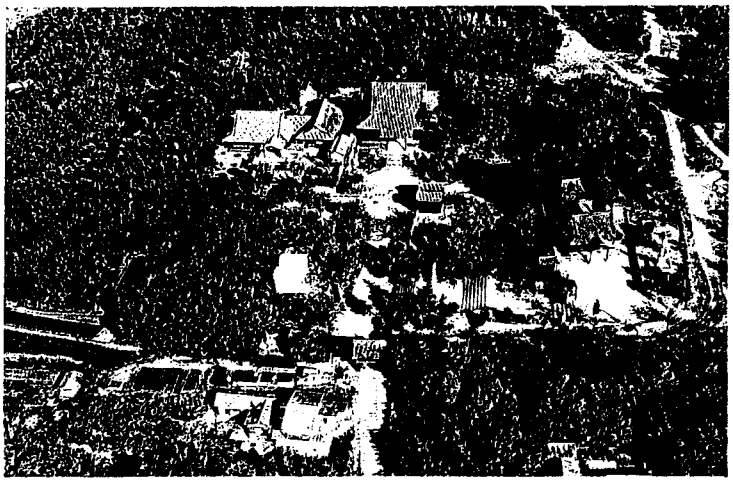
１５９５年（文禄４）宇喜多秀家は分国検地のあと、寺領として約８０石を安堵した（同年１２月吉日「備前国四拾八ヶ寺并分国中大社領目録写」『金山寺文書』）。

その後、小早川秀秋、池田忠雄の領主時代も、この寺領高が踏襲され、さらに１６３４（寛永１１）に至って、池田光政から改めて大ヶ島村の内で８２石３斗６升が寄進されて、近世寺領高が確定した（「池田光政寄進状」『寺蔵文書』）。

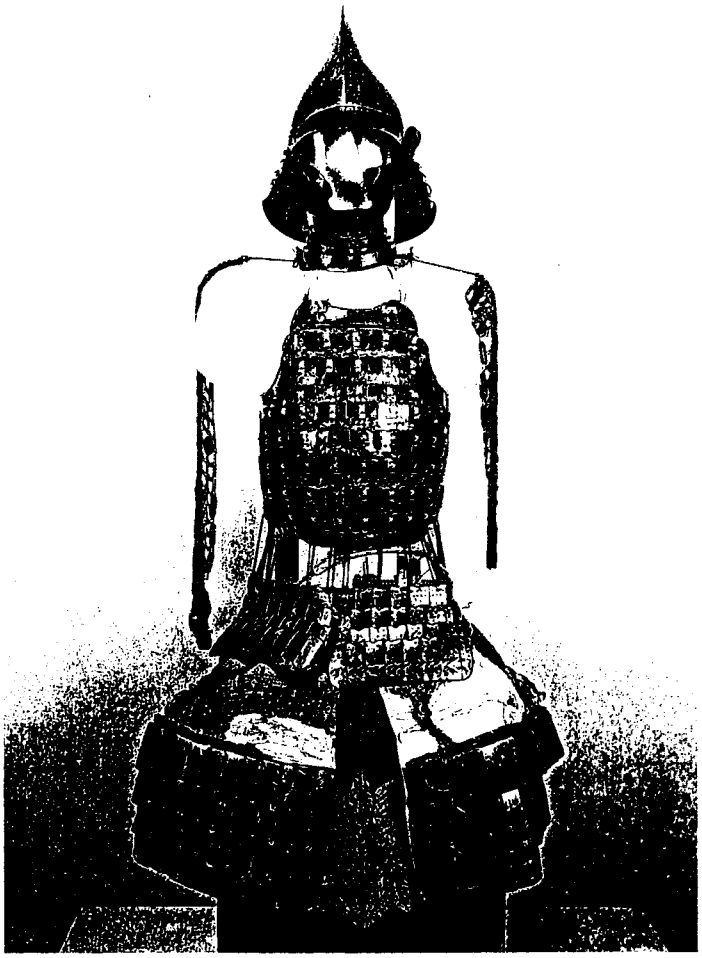
寺中寺院は、１６１９年（元和５）の時点で、本坊の等覚院のほか、南陽坊・円蔵坊・福蔵坊・中蔵坊の４坊が（「寺中五坊檀那割付定書」同文書）、また１６６５年（寛文５）には本坊等覚院、寺中に円蔵坊・浄教坊・明教坊（明鏡坊）の３院、組下寺に真如坊・不動坊・西之坊があり、それぞれが寺領を分配され、祈祷の旦方をもっていた（「寺法儀定書」同文書）。

堂宇は本堂五間四面のほか、薬師堂・荒神社・鎮守山王社・大智明大権現・天神社・仁王門等かあるが、いずれも江戸期のもの。

寺宝中、宇喜多与太郎基家（元家）の甲冑が有名。１７４６（延享３）の岡山藩士山脇貞尚のその由来記（同文書）によると、基家は宇喜多直家の弟忠家の子で、１５８１年（天正９）毛利勢と児島の八浜（現玉野市）で奮戦して討死し、遺骸は当寺に葬られた。そのとき着用していた甲冑が奉納されたものである。なお、当寺の主要文書は「岡山県古文書集」第四輯に収められている。



大賀島寺全景



宇喜多基家甲冑

# 余慶寺（よけいじ）

邑久郡邑久町北島寺山にある天台宗の寺院。山号は上寺山（うえてらさん）。収蔵庫に薬師如来坐像、聖観音立像（ともに国指定重要文化財）、十一面観音立像（県指定重要文化財）が安置されている。

寺伝によると、古くは日待山日輪寺、慈覚大師再興後に本覚寺、その後上寺山余慶寺と改称したという。境内には本堂（国指定重要文化財）、脇堂（薬師堂）、地蔵堂、三重塔、開山堂、十王堂、愛宕堂、鐘楼、梵鐘（県指定重要文化財）などがある。棟札によると、本堂は１５７０年（永禄１３）赤枝弥三衛門光国一族が秋山道林禅定門の仏果菩提のため建立、愛宕堂は１７０３年（元禄１６）邑久郡上山田村の大工尾形太郎左衛門信清が同村小工柴田亦次郎と建立したもの。

薬師如来坐像は南麓の門前村から脇堂に移したという説がある。塔頭は寛文年間（１６６１～１６７３）７院７坊、１７１４年（正徳４）５院３坊、現在は本乗院、吉祥院、明王院、円乗院、定光院、恵亮院の６院である。

# 余慶寺本堂

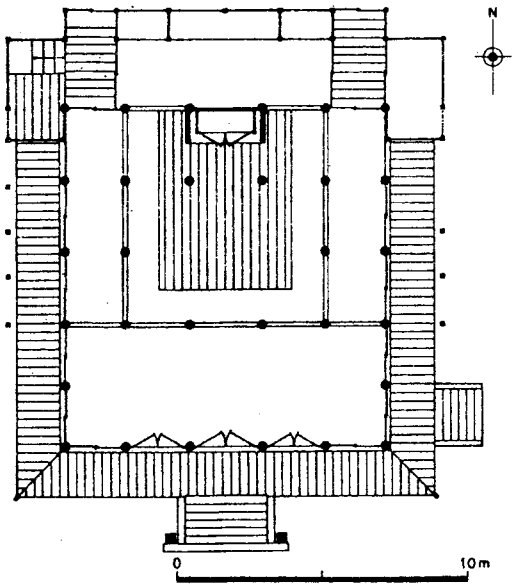
１９７９年（昭和５４）国指定重要文化財。

邑久郡邑久町北島にある室町時代の特色を持つ寺院建築。観音堂とも呼ばれる。桁行５間、梁間５間、単層、入母屋造、本瓦葺、唐破風造の向拝が付く。妻飾は二重虹梁大瓶束（こうりょうたいへいづか）式とし三つ花懸魚（げぎょ）をつるす。軒は二重繁棰（しげだるき）。柱は総円柱で、中備に蓑束（みのづか）を用い、組物は和様の二手先（ふたてさき）とし、木鼻（きばな）は丸彫式の象鼻に移行する一歩手前の形で、シカミのない繰型（くりがた）としている。

内部は前２間通しと両側１間通しが外陣で、内側の３間四方を内陣としてある。天井は内外陣ともに竿縁（さおぶち）天井で、内陣との境には菱欄間（ひしらんま）をはめてある。また内陣の天井下の板壁には彩色された観音二十八部衆が描かれている。内外陣を結ぶ大虹梁には古い形の錫杖（しゃくじょう）彫がしてある。来迎柱は黒漆塗で、柱頭は極彩色の文様が施してある。須弥壇（しゅみだん）の胴羽目板には唐様で葡萄や椿を唐草風に彫刻し、粉彩した入母屋造の宮殿型の厨子が置かれ、本尊の千手観音像が安置されている。この須弥壇や厨子の装飾は桃山期を思わせるものがある。

余慶寺本堂

余慶寺本堂平面図



## 《参考》余慶寺十一面観音立像(りゅうぞう)

１９７９年（昭和５４）岡山県指定重要文化財。

邑久郡邑久町北島の余慶寺にある古代末期の仏像。木造、素地。像高 172.6cm。欅材の一木造で、背刳(せぐり)を入れて背板を当てるほか、両肩口から先および足先を矧(は)ぐ。また、頭上の化仏(けぶつ)は大部分が刻み出しになっているが、そのうち３面だけ植え込みにしている。両足の間は彫り貫かずに材を残し、それを下方へ延長して枘(ほぞ)となし、台座に挿して像を立てたもようである。

像の表面は現在は少なくとも素地であるが、これは初めから彩色を加えなかった可能性も考えられる。後補部分としては、両肩以下上肢の全てと背板が桧材による江戸時代の後補で、これには胡粉地(ごふんじ)彩色の痕があり、鋲(かすがい)を打って留めている。また３面の植え込み化仏と両足先も桧材の後補であるが、これは、あるいは近年の模古作的補修かもしれない。

この像は１２世紀末、藤原後期の温和優美な様式を示し、ことに尊顔の可憐な表現にすぐれている。しかし技術的には、平安前期以来の一木造手法をそのままに伝え、尊顔以外は思いのほかに素朴な表現をみせている。あるいは、一種の本地仏的性格を帯びた仏像ともみられ、いろいろ興味深いものがある。

余慶寺十一面観音立像

## 《参考》余慶寺聖観音立像(りゅうぞう)

１９１７年（大正６）国指定重要文化財。

邑久郡邑久町北島の余慶寺にある古代後期の仏像。桧材の一木造で、肉身の表面は漆箔(しっぱく)、衣の上は彩色かと思われるが、現在はその彩色がすっかり落ちて素地をあらわしている。

像高168cm。頭、体、両肩も含めて完全な一木彫(いちぼくちょう)になり、内刳(うちぐり)もなく、さらに像の根幹材は、体部の幅だけ像底から下方へ梯子状に伸び、これを新しい蓮華座に挿して本体を立てている。

もっともこれが元来の造作かどうかは決めかねる。この聖観台像は最初、頭頂から足下の蓮肉まで通しての一木造であった可能性がある。尊容は頭上に筒型宝冠をかむり、右手を垂れて掌を前に向けて、左手は屈臂(くっぴ)して前方に出た手で何かを執るように指を結んで立つ。その左手に蓮華を握っていたと仮定して、長らく聖観音と判断されてきたようであるが、一見しては特色の少ない普通の脇侍菩薩形であり、最近、その

余慶寺聖観音立像

作風の近似性を取り上げてこの寺の薬師如来坐像の脇侍日光菩薩として造立された可能性を指摘する向きもある。

技法的には古い一木彫に作りながら、様式的には一抹の温和、典雅が加わっているところから、１０世紀後半から１１世紀初期の藤原時代と判断され、薬師如来坐像とともに注目すべき優作である。

## 《参考》余慶寺薬師如来坐像

１９０１年（明治３４）国指定重要文化財。邑久郡邑久町北島の余慶寺にある古代後期の仏像。桧材の一木造に属し背刳（せぐり）を入れて背板を当て、肩、臂、手首、膝などを矧（は）ぐ。表面は漆箔（しっぱく）。像高182cm。

余慶寺薬師如来坐像

衲衣（のうえ）を遍袒右肩（へんたんうけん）に着て、右手は施無畏（せむい）印、左手の掌に薬壷（やっこ）を受ける普通の薬師坐像であるが、作風はきわめて個性的であり、頭上の大粒の螺髪（らほつ）はだいたい切付であるが、髪際の一列だけわざわざ植付にしており、そのため頭が一層重く、額も狭い印象を強めている。また左肩下がりの襟元に一つさわだって旋転（せんてん）を巻き込んでいる。この重い頭部と左胸襟の旋転は備前および出雲地方の平安時代前期から中期にかけての仏像の中にまま認められ、今後の研究が注目される。

尊容は森厳の趣が深く、体躯（たいく）は重厚にして、衲衣の襞に翻波（ほんぱ）線が刻まれているところは、平安時代前期に流行した、いわゆる貞観様式を多く残しているが、いろいろな点から藤原時代のごく初期の１０世紀後期あたりに比定される。ともあれきわめて特異な風格をそなえ、崇高で霊威に満ちた仏の表現として、芸術性はきわめて高く、瀬戸内圏を代表する傑作の一つと評して過言ではない。

## 余慶寺の梵鐘

１９５６年（昭和３１）岡山県指定重要文化財。邑久郡邑久町北島にある余慶寺蔵。上寺山の晩鐘とも呼ばれ、室町時代末期に鋳造された胴張りのある和鐘。総高94.8cm、口径59.1cm、重量105Kg。

余慶寺梵鐘

竜頭は竜が単純化されやや小さく、笠形はややふくらみを持っている。鐘身は上帯、乳の間、池の間、中帯、草の間、下帯、駒の爪を備え、４条の縦帯によって谷間を４区に分けている。乳の間には４段４列の乳が各区に１６固、合計６４個あり、欠損はない。撞座は八葉蓮華文で、竜頭と長軸線の方向にあり、しかも位置が低い。駒の爪の

# 静円寺(じょうえんじ)

邑久郡邑久町本庄字横尾にある真言宗古義派の寺院。山号は横尾山。

本尊は十一面千手観音菩薩。１７０１年（元禄１４）成立の『備之前州邑久郡横尾山静円寺記』によると、７３０年（天平２）行基によって創建され、天平勝宝年中（７４９～７５７）報恩により備前四十八カ寺のに選ばれたが、まもなく堂宇を焼失、延暦年中（７８２～８０６）印喜法師によって再興されたという。

その後、僧坊３０余、寺領３００町歩（３００ha）を有して栄えたが、宇喜多秀家の検地により、寺領は５０右に減少。このとき僧坊も多く廃棄されたと伝える。江戸時代には寺領１５石余、院主光明院のほか、寺中に中道院、安楽院、地蔵院、定光院の４院があったが、現在は光明院、地蔵院、安楽院の３院だけとなっている。

# 静円寺多宝塔

１９６０年（昭和３５）岡山県指定重要文化財。

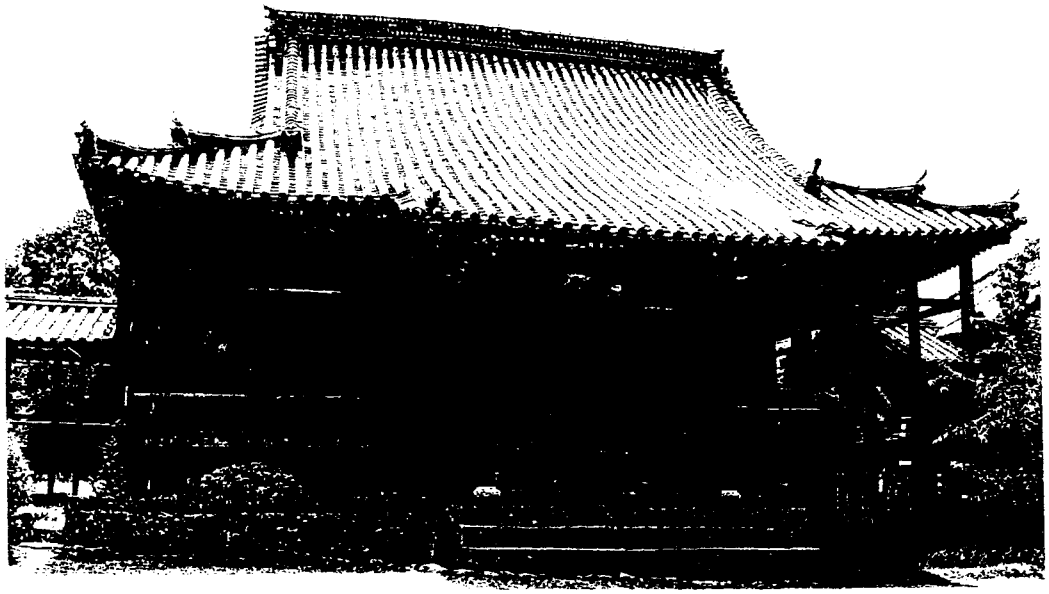
邑久郡邑久町本庄にあり、本堂の北側に南向きに立つ。初層頭長押より下は寛永（１６２４～１６４４）、それ以外は１６９０年（元禄３）の再建。方３間、総高１２ｍ。柱は欅の総円柱。上層は円筒形の塔身に宝形造の屋根をのせ、胴部に勾欄をまわしてあり、軒は一軒扇垂、小組格(にくみごう)天井をつくり、組物は出三斗(でみつど)とする。下層軒は二重繁垂、蛇腹(じゃばら)支輪を設ける。心柱は下層の中央天井から起こって上層を貫き、相輪に達する。小ぶりな多宝塔であるが、全体の構成、装飾技法など苦心のあとが見受けられる塔である。内部は四天柱をもって内陣、外陣に分かち、折上小組格天井とし、内陣に須弥壇(しゅみだん)を設け、金剛界の大日如来を安置してある。なお、この塔の相輪高は3.63ｍである。

一般に三重塔、五重塔の相輪は露盤(ろばん)、伏鉢(ふせばち)、請花(うけばな)、九輪、水煙、竜車、宝珠で構成されるが、多宝塔は露盤、伏鉢、請花、九輪、続いて水煙のかわりに三重蓮華（下が４弁、中が６弁、上が８弁）としその上に宝珠を設け、これに水煙が付いている。

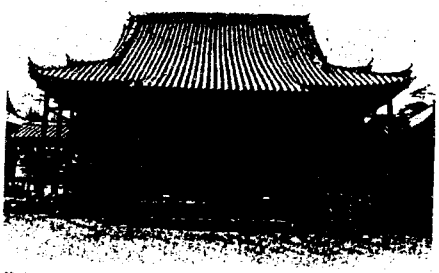
# 静円寺本堂

１９５６年（昭和３１）岡山県指定重要文化財。邑久郡邑久町本庄の旧虫明往来に近い丘陵地にある。棟札に「天正七年（１５７９）十一月三日上棟」とあり、桃山時代の再建。もとは西側の山上にあり、江戸中期現位置に移転したもの。桁行５間（11.86ｍ）、梁間５間（11.77ｍ）、単層、入母屋造、本瓦葺。妻飾は二重虹梁大瓶束式に蟇股(かえるまた)を付した豪快で優美なものである。破風下には三ツ花懸魚(はなげぎょ)を吊ってある。柱は檜の総円柱。

組物は和様の出組で一手先とし、蓑束の中備(なかぞえ)を立てる。木鼻は絵様繰型。背面を除いて３面には勾欄(こうらん)のない縁をまわし、正面に１間の向拝が付いている。内部は前２間通りが外陣で吹き放しとなっている。内陣との間を虹梁でつないでいるが、この虹梁(こうりょう)には古い様式のある錫杖彫(しゃくじょうぼり)が刻まれ、袖切は大まゆとりにしてある。　内陣は竿縁天井で拭板敷となっており、正面に禅宗様の須弥壇を設け、入母屋造、宮殿形の厨子を安置する。厨子は美しい塗装がなされ、蕨手や羽目の装飾に桃山時代の技法がみられる。また正面の桟唐戸に付けてある五三桐も同時代のものである。

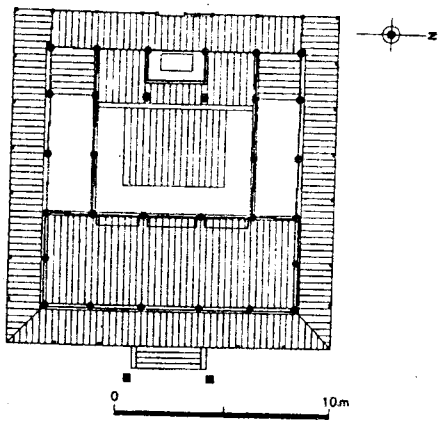


静円寺本堂



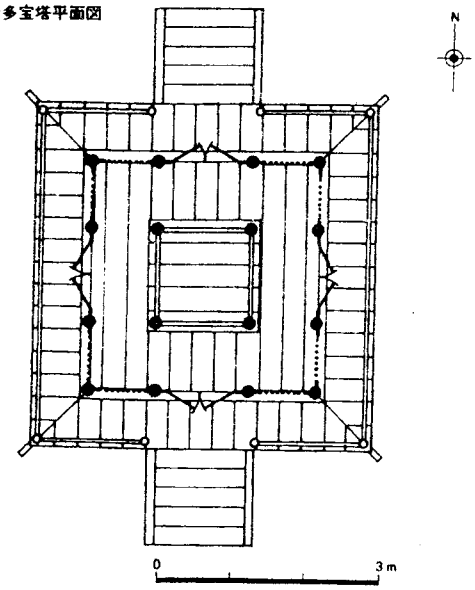
静円寺本堂

静円寺本堂平面図



静円寺多宝塔

静円寺多宝塔平面図



# 本蓮寺

邑久郡牛窓町牛窓関町にある日蓮宗の寺院。山号は経応山。１３３８年（暦応元＝延元３）春、大覚大僧正が小豆島から牛窓を巡錫し、在地の豪族石原佐渡守（法名・信功尊儀）を教化し、この地に法華堂を建立したと伝える。

その後１４３８年（永享１０）日暁が師の本能山開山日隆の命で牛窓に留錫して法華堂を再興し、石原但馬守道高を教化した。しかし『本蓮寺文書』の「牛窓浦法華堂」の初見は１４５０年（宝徳２）で、法華堂創建の事情は明らかでない。道高は次男愛千代麿を日暁の弟子として出家させるとともに、寺領２００石を寄進し、法華堂を経王山本蓮寺と改めたという。日隆が本蓮寺の寺号を授けたのは１４５８年（長徳２）で、住職は本行院日暁である。１４８３年（文明１５）日暁の没後、１４８９（長享３）愛千代麿の蓮像院日澄が住職に補任された。１４９２年（明応元）日澄は本願旦那の石原修理介伊俊（これとし、日澄の兄ともいう）らの勧進を得て、本蓮寺本堂（国重要文化財）を建立。番神堂（同）もこの頃の建立と推定される。なお、中門（同）もこの頃の建立と推定されている。

日明・日朝貿易を背景に栄えたと思われる石原氏も戦国時代には衰え、また小早川秀秋の寺領没収にあって本蓮寺は衰えたが、１６０５（慶長１０）寺領３０石、１６７４年（延宝２）３３石余に復す。朝鮮通信使の往来が始まると、１６３６年（延宝２）以後通信使の一行は牛窓港に立ち寄り、本蓮寺はしばしば通信使の接待、宿泊の場所となる。国指定重要文化財の本堂を始め、番神堂、中門のほか三重塔、鎮守堂、祖師堂、鐘堂、鬼子母神堂が現存する。

なお『本蓮寺文書』８４点が岡山県立博物館に所蔵されている。

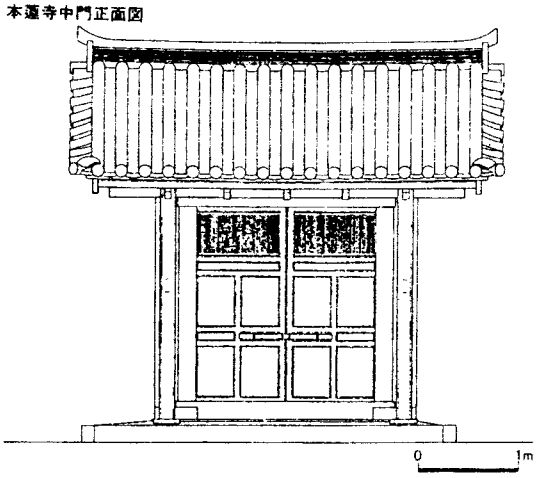
# 本蓮寺中門

１９７０年（昭和４５）国指定文化財。邑久郡牛窓町牛谷の本蓮寺にある寺門。切妻造、本瓦葺。棟門形式の四脚門になり、本柱は左右２本の円柱で、柱頭で冠木を受けると同時に、その上方へ両取方柱状の斗束を共木で造り出し、実肘木を介して化粧棟木の下を受ける手法は、この門独特の特色である。この斗束の形や、実肘木と男梁、女梁の先端にみえる絵様繰型に室町時代後期の様式がみえる。

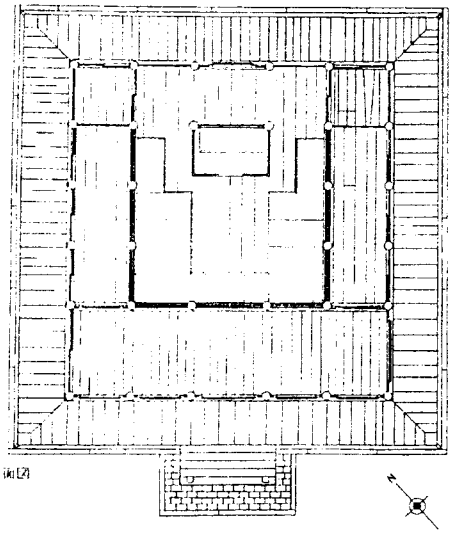
軒は一重疎垂、小舞裏。全体に江戸時代の後補材が多く、ことに柱間に釣り込まれた桟戸は１９７４（昭和４９）から１９７６年（昭和５１）にかけての解体修理の時に新補された。

本蓮寺中門

本蓮寺中門正面図

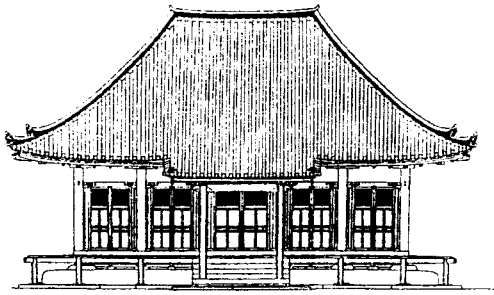


本蓮寺本堂

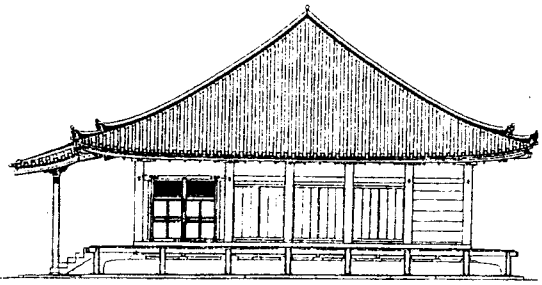


平面図

本蓮寺本堂



正面図

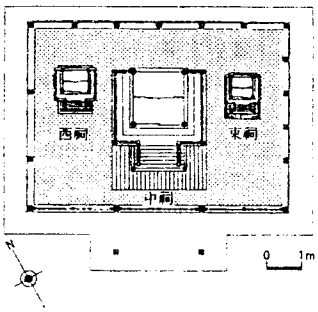


側面図

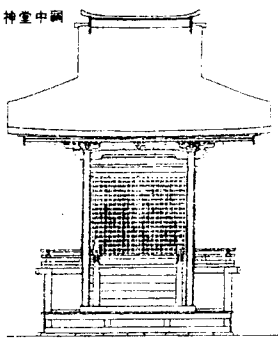
0 5m

本蓮寺善神堂

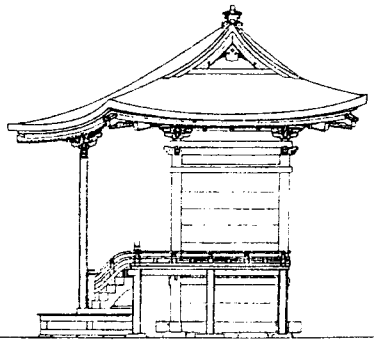
善神堂配置図




善神堂中祠



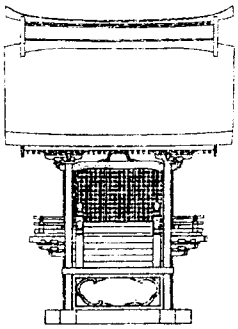
正面図



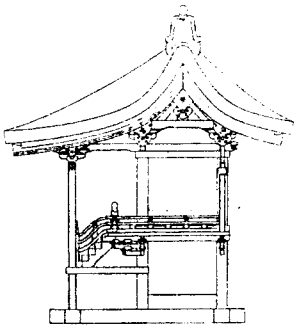
側面図

0 1m

善神堂西祠



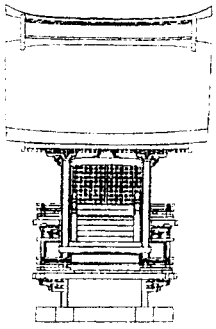
正面図



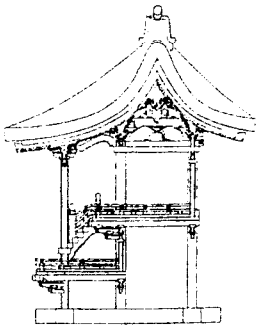
側面図

0 1m

善神堂東祠



正面図



側面図

0 1m

# 本蓮寺番神堂

１９５８年（昭和３３）国指定重要文化財。

邑久郡牛窓町牛窓の本蓮寺にある中世の神社建築３棟。

番神堂は日蓮末寺院独特の鎮守社で、法華経を守護する三十日番神を祀る祠である。現在３社並んでいるが、すべてか番神を祀っていたわけではないようである。３社は東祠、中祠、西祠と称される。中でも中祠はひときわ大きく、方１間、入母屋造、柿葺（こけらぶき）で、前面に向拝の庇（ひさし）を葺き降ろしている。向拝柱は細い面取角柱で、水引虹梁（みずひきこうりょう）の上に、ザクロの樹を左右均整に横図した蟇股（かえるまた）を置く。この蟇股は若葉彫刻を彫った手挟（たばさみ）とともに観るべきものである。身舎（もや）は床を高く張って腰に擬宝珠勾欄（ぎぼしこうらん）付きの縁が三方にめぐり、正面は引違格子戸をはめ、他の三方は板壁である。

柱は円柱で斗供（ときょう）は三ツ斗枠肘木（ひじき）。柱頭に禅宗様の木鼻（きばな）を出す。軒は二重疎棰小舞裏（まばらだるきこまいうら）。この中祠は１４９２年（明応元）ごろに本堂と年代をあまり隔てず建てられたものらしく、蟇股のザクロの彫刻はこの中祠がもとは鬼子母神堂であったことを物語っている。東祠は一間社流造・柿葺の小社で、これも床を高くし、身舎の三方をめぐる凝宝珠勾欄付きの縁の下に縁束を立てず、二手先挿肘木を出して支え、さらに向拝の下段にもう一重勾欄付浜縁を三方に付し、これもまた二手先挿肘木で受けるという、異色の造りになっている。柱は円柱で、斗供は三ツ斗。正面に引違格子戸をはめ、二方は板壁。向拝の水引虹梁の上や身舎の中備に蟇股を置き、向拝柱から本柱へ海老虹梁をかける。また独特の木鼻を柱頭に出す。軒は一重繁棰。妻飾は笈形付大瓶束。東祠は墨書により１４６８年（応仁２）と判明した。これは寺外にあった天神社かといわれる。

西祠は一間社流造、柿葺。構造大体東祠に近いが、規模はこころもち大さく、東祠にあった下段の縁はない代わり、正面の土台と木階との間の羽目板に格狭間を表している。また身舎正面格子戸上には唐草透彫の横に細長い欄間がある。妻飾は豕扠首である。天井板の墨書から、１５００年（明応９）に住持日澄と石原伊俊の建立で、大工も藤原広久以下の人々とわかっている。内部祭壇の構造から番神堂に間違いないといわれる。なお以上の３祠に覆屋がかかっており、江戸時代の建築である。解体修理は１９６４年（昭和３９）に施された。

# 本蓮寺本堂

１９４２年（昭和１７）国指定重要文化財。邑久郡牛窓

の木蓮寺にある中世の仏堂。桁行５間、梁間５間、一車、寄棟造、本瓦葺。正面中央１間に向拝を付し、五級の木階を設ける。基台は白亜の亀腹を築き、縁をめぐらした身舎を建立する。柱は円柱。斗供は最も簡素な舟肘木。軒は二重疎極小舞裏。これらの手法はむしろ住宅的である。正面５間、左側第１間、背面中央にそれぞれ桟唐戸を釣り入れ、背面のそれは、現本堂の前身建物からの流用かと考えられる古いものである。その他の左側および右側の扉は引違板戸を用いている。内部は前方横１間通りが外陣で鏡天井を張り、内陣は３間４間で猿頬（さるぼお）天井になり、両側に奥行１間通りの脇間がつく。外陣や脇間との境はすべて蔀（しとみ）格子をはめ入れ、外陣と脇間の口は両開板唐戸をつる。

内陣柱は黒漆塗、来迎柱は箔押（はくおし）。来迎壁の前に禅宗様に和様を折衷した仏壇を設け、羽目に複刈な繰型の格狭間（こうざま）を入れ、ことに正面３個の内には

一律の宝相華唐草（ほうそうげからくさ）の装飾彫刻を充填し、側面の分は菱型盲連子（めくられんじ）を刻んでいる、この本堂の棟木の墨書によれば１４９２年（明応元）９月に住職の蓮像院日澄が本願、石原修理亮伊俊が大檀那となって、諸檀那を勧進し、その奉加を受けて建立したもので、建築の大工は藤原八郎右衛門広久であった。

## 《参考》本蓮寺文書

邑久郡牛窓町関浦の日蓮宗本蓮寺に伝えられ、現在岡山県立博物館に所蔵されている文書。この文書は１３００年（正安２）から１７０３年（元禄１６）に及ぶ８７点。多くは室町時代の田畑寄進状、田畑売券で、当時の田畑の売買価格、貨幣（宋銭）の流通状況、作物の種類のほか、文中には徳政文言もうかがわれ、中世の社会経済史料として極めて貴重。その他、本蓮寺寺領帳、本蓮寺由緒書、近世大名の寺領寄進状なども含まれている。

## 《参考》石原氏

室町時代備前国邑久郡牛窓地方の豪族。
牛窓の日蓮宗寺院本蓮寺の由緒書によれば、室町中期文明年間（１４６９～１４８７）のころ、石原但馬守道高が同寺の諸伽藍を健立し、併せて多数の寺領を寄進したとある。また現存の本堂の棟木にも１４０２年（明応元）石原修理完伊俊（これとし）が本願檀那となって建立した旨の墨書銘が見え、石原氏は室町時代牛窓地方最大の豪族武士であったようである。また中世の港町牛窓の貿易のことなどにも中心的な役割を果たした存在であったと思われる。本蓮寺の裏山には石原氏の一族の墓と伝える五輪塔１０数基がある。

## 安仁（あに）神社

岡山市西大寺一宮にあるもと国幣中社。祭神は五瀬命とされているが、災説も多い。『続日本後紀』の８４１年（承和８）２月８日の条に「安仁神預名神焉」とあるのが初見であり『延喜式』に記載された備前国唯一の名神大社である。

『備前国神名帳』西大寺本、同山本には、「正二位安仁大名神」、神上金剛寺本には、「従一位安仁大晒神」とあり、古くは「久方宮」と称したともいう。

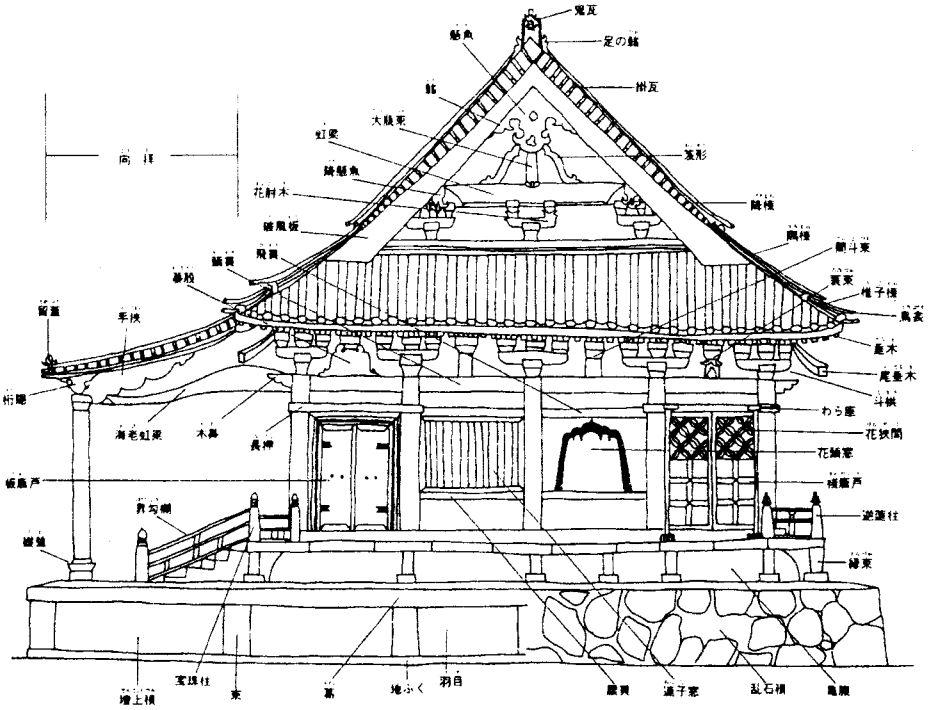
当社は古くから備前二官とされ、１３６７年（貞治６）ごろの寺領は１１町３反３０代であった。また、同じころ邑久郡豊原庄や鹿忍庄に「安仁社大般若免」「安仁社経免」の存在したことが同社文書にみえている。

往古は現社地の東方宮城山（鶴山）の山頂にまつられていたが、その後山麓の宇尾の上に移された。現在の社地は１６７０年（寛文１０）に岡山藩主池田綱政が「令子誕生」を祈願し、その成就した後の１７０５年（安永２）に造成したもので、その時社殿の改築が行われ、社領５石が寄進されている。

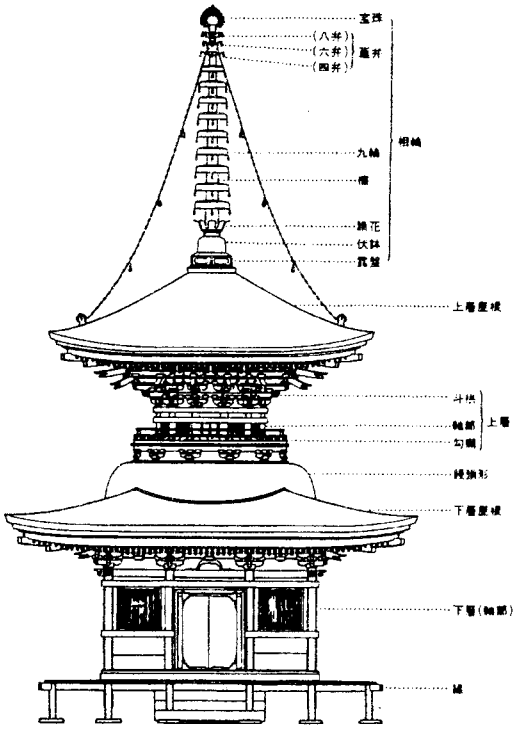
その後、１７８０年（安永９）に弘法寺（邑久郡牛窓町千手）の鎮守であった山王権現が合祀され、社領は５５石となった。岡山藩主池田家では当社を祈願所と定め、明治初年まで毎年正月２５日同姓の家臣による代参が行われていた。

１８７１年（明治４）に国幣中社に列し、１８８５年（明治１８）に社他を拡張し、社殿の改築が行われた。現在の社殿はこの時改築である。

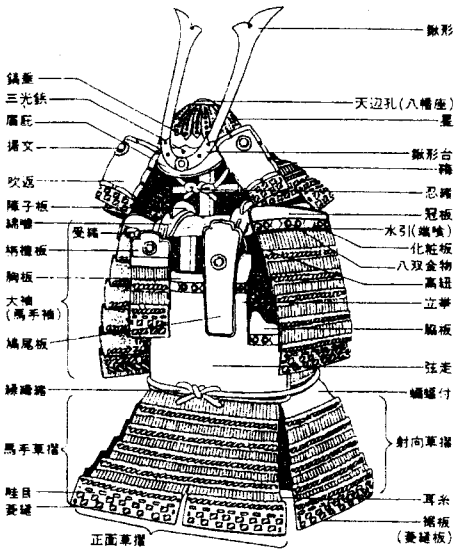
境内摂社には左補神社、右補神社（祭神は幾多神）、末社に荒神社、稲荷神社がある。なお、当社には中世文書および１８９１年（明治２４）に境内から発見された袈裟襷文銅鐸（国認定重要美術品）１個があって宝物とされている。



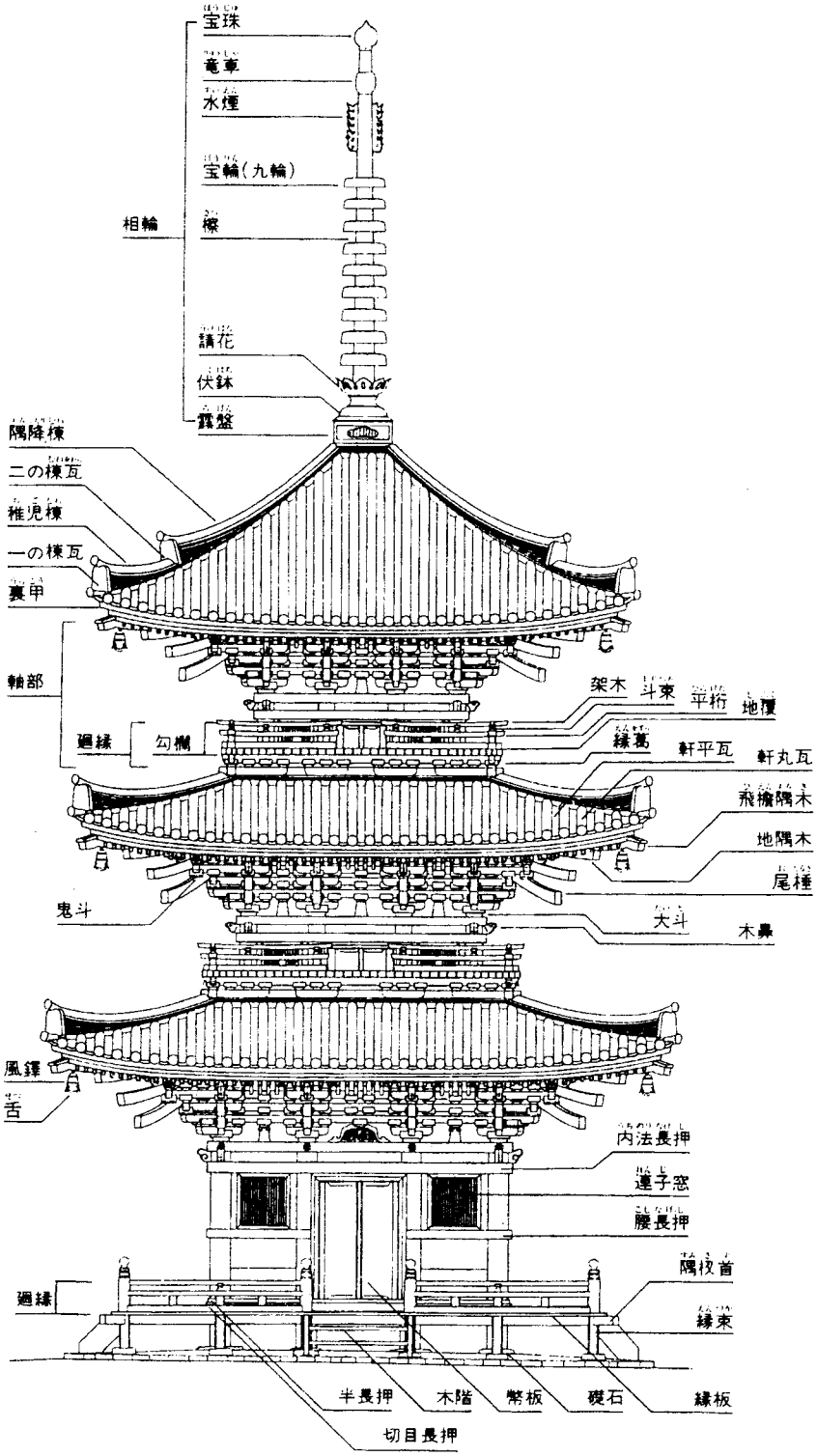

建物各部名称




多宝塔各部名称




甲冑各部名称


宝珠
竜車
水煙
宝輪(九輪)
相輪
檫
請花
伏鉢
露盤
隅降棟
二の棟瓦
稚児棟
一の棟瓦
裏甲
軸部
架木
斗束
平桁
地覆
廻縁
勾欄
縁葛
軒平瓦
軒丸瓦
飛檐隅木
地隅木
尾棰
鬼斗
大斗
木鼻
風鐸
舌
内法長押
連子窓
腰長押
隅枝首
廻縁
縁束
半長押
木階
幣板
礎石
縁板
切目長押

三重塔各部名称